

風間浦村勢要覧 2017

風間浦に生きる

風間浦村勢要覧 2017

風間浦村勢要覧 2017

風間浦に生きる

風間浦に生きる



風間浦村勢要覧 2017 平成29年12月発行

■発行・編集／風間浦村役場（総務課） 〒039-4502 青森県下北郡風間浦村大字易国間字大川目28-5
Tel 0175-35-2111 Fax 0175-35-2403
ホームページアドレス <http://www.kazamaura.jp/>

■印刷／協同印刷工業株式会社 青森県むつ市金曲1-15-8 Tel 0175-22-2231
■制作／株式会社 道映デザインスタジオ 青森県青森市桂木4丁目2-3 Tel 017-777-3425

※誌面の情報は平成29年12月現在のものです。名前や金額など情報が変更となる場合があります。予めご了承ください。

風間浦に生きる

発刊にあたって

私たちの郷土、風間浦村は、壮麗で豊かな自然に恵まれ、村制施行以来、128年の歴史を積み重ね、その歩みを続けてまいりました。今日まで、村勢発展のために心血を注がれました先人の方々の英知と努力に對しまして、敬意と感謝を申し上げます。

この21世紀は、世界各地において、地球規模での環境問題や経済格差問題など、諸問題が山積している時代であり、村を取り巻く社会情勢においても大きな転換期を迎えようとしています。これから時代が変遷することがあっても、人と人とのつながりを深め、ここに住む人々が心豊かに、安心して生活できる地域づくりを目指してまいります。

本村発展の礎となる水産業、林業、観光を柱とし、「地域経済・産業の活性化」、「住みよい環境づくり」、「保健・医療・福祉の充実」、「地域防災体制の強化」のため、村民皆様のお力添えをいただきながら、さらなる村勢の発展を遂げられるよう努力を重ねてまいります。

この要覧は、風間浦村の歩み、現在の姿、そして未来への展望をとりまとめたものでありますので、なお一層のご理解を深めていただければ幸いです。

風間浦村長 富岡 宏

CONTENTS

■村長挨拶……………01

■風間浦村の人たち

木下 尚さん・清さん……………03

長谷雅恵さん……………05

佐賀平一郎さん・一戸正夫さん…07

中野和子さん……………09

駒嶺剛一さん……………11

■風間浦村を知る

【風間浦村を知る① 風間浦村の文学】

風間浦村を愛した小説家たち…………13

井上 靖氏……………13

水上 勉氏……………14

【風間浦村を知る② 風間浦村の歴史】

開拓の祖 佐賀清太郎氏…………15

風間浦村誕生の概要と地名由来

……………16

【風間浦村を知る③ 風間浦村の自然】

下北ジオパーク……………17

【風間浦村を知る④ 風間浦村の祭り】

神と共に暮らす

龍神祭……………19

桑畑立石大明神……………20

4つの地区、4つの祭り

若宮稲荷神社祭典・八幡宮祭典 21

大石神社祭典・折戸神社祭典 22

【風間浦村を知る⑤ 風間浦村の温泉】

本州最北の温泉郷……………23

【風間浦村を知る⑥ 風間浦村のイベント】

笑う門には福も人も来る……………25

下北ゆかい村 風間浦鯨感謝祭

……………25

ゆかい村 海鮮どんぶりまつり、

布海苔採り体験ツアー

……………26

■風間浦村の生活

漁 業……………27

商工観光……………29

医療福祉……………31

教育文化……………33

生活環境……………37

■議 会……………39

■行 政……………40

■村民憲章・村のシンボル・村民歌

……………41

■資 料 編……………43

漁師 木下 尚さん・清さん 親子

鮫鱈漁は例年だと11月15日が解禁。今年はどうなのか、海に出てみないとわからない。「蛇浦は地域愛が強いところ。自分にとっても家族にとっても住みやすいところ。だから漁業で蛇浦を元気にできたらうれしい」。



風間浦村の人たち

できる限りは生涯現役
息子と二人で頑張るよ

地元・蛇浦で漁師を生業にする木下さん親子。近年の異常気象で魚種や魚の獲れ方が変わっている今日、自然相手の漁業はなかなか厳しい。それでも5艘の船を持ち、鮫鱈の刺し網漁などで地元の漁業を盛り上げてきた。二人三脚、親子二代で船に乗っているのも、この辺りではめっきり珍しくなったという。

「学年で1人が漁師を継いでいればいい方」と清さん。「俺も父親がはえ縄でマグロを獲ったりしてたから」という尚さんも、学校を卒業してすぐに父親について船に乗った。「俺が20歳か21歳の頃だったかな、父親が病気で亡くなってそのままずっと。もしも船がなかったら漁師をやめていたかもしれないけど、もったいなくてね。息子もそうでないかな。小さな頃から俺の仕事を見ていたから、漁師の仕事も自然と覚えたと思う」と照れくさそうに話してくれた。親子で漁に出るのは何より気を使わなくてもいい。家族以外に手伝いを頼めば手間賃がかかるし、獲れた魚を分けてやらなければならない。その点、親子水入らずなら、水揚げが少なくても何とかやっていける。

「古くからある地域だからね、蛇浦の人たちは仲がいいんだよ」と口を揃える2人。それでも漁港が大漁で沸く日は特別だという。去年も今年もヤリイカがいっぱい獲れて、荷さばきを手伝う母さんたちが港にあふれた。「おしゃべりしながら秤にかけたり選別したり本当に賑やかだよ。みんなが顔見知りだからね。一致団結でわっと集まって盛り上げる。小さい集落だもの、バラバラよりみんなでやるのがいいに決まっている」。

現在73歳の尚さんに、いつまで漁師をやるの

か聞いてみた。「膝が悪くなければ80でもやっているよ。仲間の漁師でも92で昆布とったり鮑とったり雲丹とったり、まだ2年や3年は大丈夫だろうな。俺もできるうちは続けたいし、生涯現役で息子と一緒に頑張っていきたいと思っているよ」。

今では全国的に名前が知られるようになった「風間浦鮫鱈」。この鮫鱈をピンポイントで狙うために、30センチ以上の目の網を特注して使い始めたのが尚さん。「最初は奨められて使ってみたの。そしたら300キロや400キロの大漁で、みんながその網を使うようになってね」。尚さんの話を聞くうちに、それまで黙っていた清さんが静かに話し始めた。「風間浦の鮫鱈漁を今の形にしたのは親父、漁師の師匠としてすごいと思っています」。木下さん親子は、これからもこの村で漁師を続けていくことだろう。





下風呂温泉女将の会会長
長谷 雅恵さん



下風呂温泉女将の会の皆さん。

湯治場の雰囲気を残した下風呂温泉。夜ともなれば旅館やホテルの看板に灯りが入る。同じ場所には「大湯」「新湯」の公衆浴場もあり旅行者も気軽に入ることができる。街を気ままにぶらぶらして、公衆浴場で地元の人と話すのも旅のいい思い出となるだろう。



本州最北の温泉郷 下風呂温泉郷



下風呂温泉郷（海側）

笑顔で帰っていただけるよう
一生懸命おもてなしするだけ

永く本州最北端の湯治場として親しまれてきた「下風呂温泉郷」。この温泉場を盛り上げようと、旅館やホテルの女将さんたちが集い活動を行っているのが「下風呂温泉女将の会」。会長を務めるのが、老舗「まるほん旅館」の女将、長谷 雅恵さんだ。「うちは私で6代目位かな。明治13年頃に作られた下風呂温泉のパフレットに載っているから」。とすれば、少なくとも130年以上前から旅館を商っていることになる。下風呂温泉は室町時代からあったようだが、各旅館に温泉を引き始めたのは比較的新しく、それまではお客も公衆浴場を利用していたのだという。「下北が国定公園になった頃は、それはもうすごく賑わっていました。それに恐山の夏の大祭では、うちにも40人くらいの団体が岩手や秋田から来て連日大忙し。今は道路が良くなって下風呂まで足を伸ばす人が減りました」。地方の温泉郷はバブル崩壊と以後の不況続きで、年々客足が遠のいている。景気回復の兆しが見えるここ数年でも経営はなかなか厳しい。

都会からのUターン組だという長谷さん。20年前に帰ってきた時にはすでに今のような状態。旅館や廃業した所がここ6年くらいで3件、今は9件が営業している。「当時は何で帰ってきたのってよく言われました。バブルがはじけて危機感があったんでしょうね、女将の会ができたばかりでした。私は3代目の会長なんです」。下風呂の顔としてのPRのほかに、気になっていたという足湯の清掃など地味な活動も積極的に行ってきた。今年はむつ小川原地域産業振興財団の助成金で下風呂温泉を健康と結びつけられないかと役場・保健所・病

院と協力しながら検証など進めているところ。やりたいことはいろいろあるが、一番大切にしているのが「おもてなしの心」という長谷さん。「一人一人に合わせたおもてなし。それは女将の力量にかかっています。うちみたいな旅館は古いなあとと言われることも。それでも一生懸命おもてなしして、笑顔で帰っていただくように努力しているの。下風呂の女将さんたちはみんな同じ気持ちだと思います」。

かつてここには湯治文化があった。足を伸ばせば下北の雄大な自然が堪能できる。海辺の硫黄泉は特に珍しい。しかも狭いところいくつかの源泉があり共同浴場も2つ。海岸線に温泉旅館が肩寄せ合うように建ち並ぶ、ひなびた風情を愛する人は決して少なくない。設備にお金をかけるよりも「今ある下風呂の魅力を知って足を運んで欲しい」とふんばる女将の会の活動が、実を結ぶ日もそう遠くないはずだ。



幻の「大間鉄道」跡、下風呂温泉メモリアルロードの中央にある「足湯」。温泉の源泉を引いた乳白色の硫黄泉を、天気が良い日なら遠く北海道を眺めながら楽しむことができる。



下風呂地区
若宮稲荷神社祭典
神社総代長
佐賀 平一郎さん

神事長
一戸 正夫さん



易国間地区 大石神社祭典の幹事の皆さん。

風間浦では6つの祭典がある。どれも各地域に深く根ざした祭りである。当日になると袴などの正装に身を包んだ人たちが、祭りが始まるの今か今かと待っている。家々は提灯を軒にぶら下げ、その前を山車が通り、獅子が舞いを披露する。夏から秋、風間浦は神々が集う村となる。



折戸神社祭典（蛇浦地区）



龍神祭（下風呂地区）

お祭りになるとね、仕事を休んで帰郷してくる人もいるんだよ

風間浦村には下風呂・桑畑・易国間・蛇浦のそれぞれの地区に、古くから信仰を集める神社の祭礼がある。中でも下風呂の若宮稲荷神社祭典は唯一の秋祭りとして村の祭りを盛大に締めくくる。神社総代長を務める佐賀さんによれば、若宮稲荷神社は360年前の明暦3年の勧請。平成16年の神輿の塗り替えて見つかったお札に「寛政10年、越中高岡の辻野久右エ門作」と書かれていたことから、220年近く前のものではないかという。御神輿の渡御が行われたのはそれ以後のことで、当然、神楽も必要になったはずだ。今のような船山車になったのは明治の中期頃と記録にはある。「寛政6、7年から10年にかけての下風呂は、戸数にしても50から60軒ほど。人口も300人前後だったでしょう。そういう小さな村の祭りに、御神輿を用意しただけでもすごいことです」。

江戸末期から明治初期にかけては、北海道の松前や江差の鯨場に出稼ぎに行く人が多かったというが、イカが大漁になってからは北陸からも人が来て、そのまま住み着き人口も増えた。「それで船山車も用意できたんでしょう」と佐賀さん。古文書にこの辺の人物往来を記した下りがあり、祭りになると北海道の鯨場から戻ってくるとある。今もそれは同じ。祭りのため、わざわざ休みをとって帰ってくる人もいる。下北は漁師が多いので大漁や安全を祈願した神事を大切にする。龍神様・えびす様・金比羅様・弁天様・お稲荷さんを祀っているところが多い。下風呂も単なる祭りではなく行列は厳粛、まさに神事。「なにせ自然相手の仕事ですから、怪我がなく海が平穏で魚や磯ものが獲れるのが一番いいこと。ですから

神様に頼ることが多かったのですが、下風呂のように方々にお堂を祀っているところは珍しいと思います」。村人は戸口で神様にお供えをし、地域で祭りを大事にしてきた。実家が北海道の留萌で鯨場を営んでいたという佐賀さん「昔は時化が続くとお寺にご祈祷依頼の電報を打つ。すると海が静かになったと聞きます」と不思議な話をしてくれた。

昔の祭りは青年団が中心だったが、今は若者がいなくなりお囃子は小学生に頼らざるを得なくなった。「祭りは風間浦の中でも下風呂が一番活発ではないかな。子どもたちもみんな楽しみにしていますね。うちも祭りが近づくと孫たちが何日も前からそわそわし出して、今年は山車に乗れるかと心配したりね」と優しい表情を見せる。祭りは地域をひとつにして地区同士の融和もはかる。ここで生まれて、ここで育って、この日を目指して帰ってくる人々のために、総代長としての熱い思いを祭りが来るたびに心に刻み直している。



八幡宮祭典（桑畑地区）
獅子舞は青年団が行う。囃子には少年もおり、この祭りが代々引き継がれてきたことが分かる。



大湯番台
中野 和子 さん

浴舎が壊れないうちは
ずっと働き続けたいな

風間浦村には昔ながらの風情を残す公衆浴場「大湯」と「新湯」のほかに、津軽海峡を見下ろす新しい温泉施設「桑畑温泉 湯ん湯ん♪」がある。いずれも泉質や効能・温度も違うので、村を巡りながらいろいろ入り比べてみるのも楽しい。



大湯の浴室



桑畑温泉湯ん湯ん♪の浴室

下風呂には旅館やホテルの内湯のほかに地元
に永く愛されてきた公衆浴場、大湯と新湯があ
る。2つはすぐ近くにありながら泉質や肌にあた
る感じが違う。だからお湯の好みで大湯派・新湯
派に晶^{ひき}屑が分かれるのだという。

中野和子さんは2年前からここ大湯で働いてい
る。大畑から嫁に来て40年近く「番台に座った
ばかりの頃は恥ずかしかったけど、覚えた顔ばか
りなのですぐに慣れました」。仕事は2人交替、楽
しみは営業を終えた後の入浴。「夜の9時に営業
が終わってから、男女2つずつある湯船のうち女
湯の湯船を一つだけ残しておくんです。お湯を抜
いて湯船や板・たらい・椅子を全部洗うと1時間
ちょっと。それから残した浴槽の栓を引っこ抜き
ながら自分を洗いながらだから、お湯に入ると
いってもせいぜい5分も浸かっていられるかな」
と笑う。お湯をためるのは8時間以上かかるの
に、落とすのは10分ほど。雨が降って湯量が多
い時はいいが、天気が続いて少ない時はなかなか
たまらないので大変だ。

下風呂のお湯は身体が冷めにくい硫黄泉。旅
のお客さんには「海の近くで硫黄泉は珍しい」と
よく言われる。ここのお湯は室町時代に発見され
て、浴舎ができる前はこの場所に長屋があり、そ
こに寝泊まりして湯治をしていた。長屋がなくな
ってからは旅館に宿泊し、そこから通っていたらし
い。湯治客が少なくなった今は、毎日決まった時
間にやって来る常連客の社交場になっている。70
歳以上は100円、70歳以下でも150円、毎週木曜
日は70歳以上が無料になる。むつや大畑からも
入りにくるといいますが、下風呂以外の人は200円と少

し高め。建物に年季が入っている分なのか、それ
でもかなり安い。最近では古びた公衆浴場の
雰囲気求めて、観光客の姿も目立つようになって
きた。

下風呂の温泉はどこも熱めの湯。一般的には
42℃が普通なのだが、常連さんたちはそれではぬ
るいと納得しない。大湯ではぬるめの湯船で43
～4℃、中野さんが“ちょい熱”と呼んでいる方は
45～6℃、観光客にはぬるめに調整する心配りも
忘れない。「番台にいるとお客さんからいろいろ
教えてもらえる。料理のレシピだったりね。お年寄
りから学ぶことが多くてね。まるで生き字引き、
聞いた言葉をノートに書きためたりもしてるんす
よ」。たまに海を渡って北海道の温泉にも行っ
たりするが「地元のお湯が落ちつくし一番いい」と
頬を緩ませる。「この浴舎が壊れないうちは、ず
っと働き続けたいな」。世代を越えて育まれてきた
思いやりや人情が、ここには今も静かに息づいて
いる。



桑畑温泉湯ん湯ん♪のスタッフの皆さん。



どこか懐かしい銭湯の風情が感じられる「新湯」。「大湯」
の方が少し大きい。どちらも固定のファンがいて、それぞれお
気に入りのお湯を楽しんでいる。



風間浦村商工会長
駒嶺 剛一さん



下北ゆかい村 海鮮どんぶりまつりのようす。

全国でも珍しく生きたまま水揚げされる風間浦鮫鯨。吊るし切りが一般的な鮫鯨だが、ここでは雪の上でさばかれる「雪中切り」が一般的。2月の「風間浦鮫鯨感謝祭」では、特別イベントとしてこの雪中切りが公開される。「鮫鯨フルコース」が味わえる冬季限定の下風呂温泉宿泊プランも好評だ。



風間浦鮫鯨感謝祭のようす



鮫鯨の雪中切り

定住人口が少ないなら 交流人口をいかに増やすかが課題

風間浦村で35年近くまちおこしに携わってきたのが、商工会長の駒嶺 剛一さん。村で獲れる水産物の鮫鯨やイカの加工品、津軽海峡の塩などを開発・販売する(株)駒嶺商店の社長であり、商工会青年部の時代から風間浦村を盛り上げてきたアイディアマンだ。今でこそ全国的にも注目される地域ブランド「風間浦鮫鯨」で知られるようになったが、30年以上前はひなびた温泉だけで名物もこれといって抜きん出るものはなかった。「当時はイベントを開催するのに、丸太の間伐材やブルーシートで小屋を作ったりしてね。雨が降れば地面が泥だらけになったりと大変だったな。それでもお客さんに風間浦の特産品で楽しんでもらおうと、地元の人たちがヒバの工芸品とかいろいろ作って出したら、それがよく売れてね」と懐かしむ。

「当時は山形や福島、宮城など南東北の人たちが、恐山大祭を目指して大勢やってきたもんだよ」。函館と大間の間にフェリーがたくさん航行していた時代。船は小さかったが便数が多く、旧東日本フェリーの主要航路として活気があった。お盆には乗船待ちで、大間を越えて蛇浦の折戸坂の方まで車がずらっと並んだくらい。下北と北海道を往来する車が本当に多かった。ところが、バブルがはじけて以降は村の人口が激減してしまう。「当時は商工会青年部の部長だった。若い商工業者がこの小さい村でも20人以上いたけど、今は5人もいない」。

現在の風間浦村はどうだろう。冬は「風間浦鮫鯨感謝祭」、夏は「ゆかい村海鮮どんぶりまつり」で、観光客をもてなしながら村民も楽しめるイベ

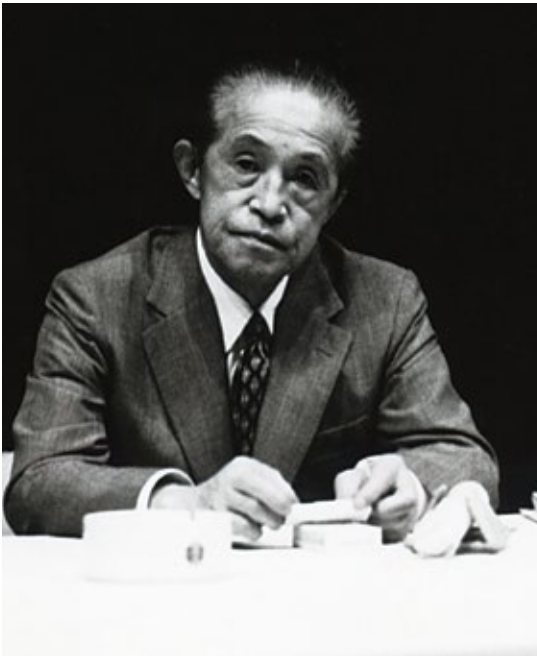
ントが定着しつつある。とはいえ課題もないわけではない。鮫鯨の水揚げがピーク時の3分の1という危機的状况を受けて、今後は鮫鯨などの地域資源をどう守り次に繋げていくかで、村の今後が左右されることになるだろう。

「定住人口が少なければ、交流人口をいかに増やすかが課題」と駒嶺さんは語る。「以前は銀座に活イカを持って行って烏賊様レースをやった。宣伝効果も上がった。しかし今はどこにターゲットを絞るべきか、商工会だけでなくこの問題に関わる人たちが一つになって、真剣に取り組んでいかなければ駄目だと思う」。村の活性化のために長く走り続けてきた、その理由は。「この村が好きだからね。みんな一緒になって風間浦を盛り上げる。そんな時が1回や2回あってもいい」。

長年の仕掛けが実を結ぶまで、駒嶺さんの挑戦は続く。



津軽海峡沖で獲れた活イカ・ウニ・アワビを堪能できる「下北ゆかい村海鮮どんぶりまつり」を楽しみにする人は多い。郷土芸能や花火など盛り沢山のイベントは毎年7月の最終土曜日に開催される。



©(財)日本近代文学館



井上 靖文学碑と除幕式での井上 靖 氏



文学碑に刻まれた「アカエリヒレアシシギ」の原稿(風間浦村所蔵)

ああ、湯が滲みて来る。本州の、
北の果ての海っばたで、
雪降り積る温泉旅館の浴槽に沈んで、
俺はいま硫黄の匂いを嗅いでいる。

井上 靖 氏

1907年生まれ 1950年『闘牛』で第22回芥川賞を受賞 1991年死去

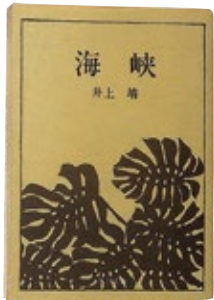
風間浦村と井上 靖 氏のつながりは、氏が小説『海峡』の最終章を執筆するにあたり、「渡り鳥アカエリヒレアシシギの声が聴ける」場所を探していたところ、知人に下北半島を紹介してもらったことから始まりました。上はその『海峡』の一説。

『海峡』は、医師「庄司」とその妻「由香里」、庄司の親友である雑誌編集長「松村」、その部下である「杉原」と「宏子」が織り成す「恋愛物語」です。そして渡り鳥がドラマのテーマとなっています。氏は昭和33年3月9日に下風呂温泉を訪れ、2晩宿泊し、津軽海峡を見渡せる「長谷旅館」の一室でこの小説の最終章を執筆されました。この『海峡』は氏の作品の中でも名作のひとつといわれ、「漁り火の見える温泉」として、風間浦村と下風呂温泉郷が世に知られるきっかけともなりました。

その後1989年(平成元年)、風間浦村では、村制施行百周年を迎えるにあたり、記念事業として井上靖文学碑を建立することを決めました。そして碑文を氏に依頼。氏は31年ぶりに来村され、碑文の構成を練りました。その時『海峡』をこの地で執筆した時のことを、とても懐かしんでいました。

同年9月30日、井上靖文学碑は海峡いさりび公園の中に建立され、その除幕式にはご夫婦揃って出席されました。その碑に刻まれた散文詩のタイトルは「アカエリヒレアシシギ」。厳しい海峡に飛来する小さな渡り鳥たちの、非情なまでの生命力、その前に屈服するしかない人間の小ささが、詩の中に読み取ることができます。

風間浦村では、この文学碑の記念に、氏愛用の万年筆で書かれた散文詩の自筆原稿を頂戴し、大切に保管しています。それは今でも村の大切な宝物になっています。



©(財)日本近代文学館

狭い日本と人はよくいうが、
東京の自宅で眠っていても、
風間の浦の波音だけはきこえてくる。

水上 勉 氏

1919年生まれ 1961年『雁の寺』で第45回直木賞を受賞 2004年死去

日本を代表する作家、水上 勉 氏の小説『飢餓海峡』の前半は、下北半島が舞台となっています。この『飢餓海峡』は氏の代表作となっており、何度も映画やドラマ化がされました。

小説を書くにあたり、氏は風間浦村のことを、「人間の荒寥(こうりょう)を表現するにもっとも適した土地」と言っています。事実氏は過去何度も風間浦村を訪れており、そのゆかりはとても深いといってもいいでしょう。

この他にも下風呂出身の女性の名前を伏して、紀行文も書いており、「わが山河巡禮 風間浦の女(文庫では「わが山河巡礼 下北風間浦」)では、『そういえば、その女(ひと)に会ったのも、下風呂ではなくて、最初は野辺地に近い浅虫の温泉であった。(中略)浅虫の夕子は、そんな私の、旅の途中で知りあった芸妓の一人である。風間浦に生まれ、風間浦から県庁所在地に近い浅虫にきて働いていた。そして、いつまでも風間浦の生家を大事にして生きていた。べつになんともないありふれた妓にすぎないが、私にとって、この夕子は、忘れられない、北の女として、今日も焼きついてはなれない』とあります。

また、その中で『飢餓海峡』を書いた後、風間浦村を三度訪れていることを記しています。新聞社の企画で、物語の舞台を歩き、その感想を書くというもので、この時、若狭、越前、京都に材をとったものが多いにもかかわらず、氏は下北半島を選んでいました。

実際水上作品には、風間浦のような村や地域が舞台のものが多いのですが、そこで暮らす人々に対しては、温かく優しい目で見つめています。氏は「私はここ(風間浦)が好きである。好きな理由は、とりわけここが日本の淋しさを代表しているからだ」と言っています。もしかしたら風間浦の風景に、幼いとき家族から引き離されて味わった「孤独」という原体験を重ね合わせていたのかもしれません。





佐賀 清太郎とは

佐賀清太郎は1864年(元治元年)12月29日、下風呂温泉郷に誕生しました。佐賀清太郎は風間浦村の開拓の祖といわれた人物でした。

清太郎の祖父、根津屋こと佐賀平之丞は江戸末期に目名新田原野32ヘクタールを開拓し、そこに花巻から十三戸の移民を入植させ、農業に従事させました。しかし、厳しい自然と当時の技術の未熟さから脱落するものが相次ぎ、ついには八戸まで減り、結果不成功に終わりました。

そしてその再興を果たしたのが清太郎でした。清太郎は祖父の意志を継いで大金を投じて目名新田の再開拓に着手、ついにそれをやり遂げたのでした。

また、祖父平之丞は布海苔養殖法を考案した人物でもあります。明治初年持ち船の冬囲いの際、引き起こし整理した岩石に布海苔が附着したのを見て投石による布海苔養殖法を考案、確立させました。その功績が認められ、1916年(大正5年)3月、祖父に代わり清太郎に下北郡水産会より功績状と銀杯が贈られました。

佐賀平之丞と清太郎が残してくれた遺産は今に受け継がれ、風間浦村の産業の礎(いしづえ)となりました。



下風呂村絵巻

功 績 状

海蘿人工養殖法は我が邦にありて本県尤も有名にして、就中本郡の如きは学者専門家の発見に先立ち業に已に其方法を講じたりしと謂ふ。今事業を考査するに君の祖父平之丞氏が明治初年の頃、自家の廻船を格囲せんとして居村沿岸に適宜集散配置せし石に海蘿の附着せるを見、事偶然に出づるを以て再三之を試み、愈々効果の顕著なるを確かめ、時の村役佐賀兵五郎氏に之を指示し、村内当事者を奨励実行せしめ、延いて漁業組合自ら斡旋するに至れり。是本郡の海蘿人工養殖法を講ぜし起源にして産額の多き亦之に因す。其恩沢今に及び功績渺からず。茲に本組合は第一回功績を査覈するに方り、遙に君が祖父の遺績頗る大なるものあるを追懐し、銀杯壹個を贈呈し之を表彰す。

大正5年3月13日 下北水産組合

風間浦村誕生の概要と地名由来

風間浦村史編集専門委員 故 立花 勇



易国間地区

明治二十二年をもつて三村を合し
その一字ずつをとつて村名を風間浦村とする

風間浦村は、本州最北端の地、下北半島の北部に位置し、東は大赤川を境に大畑町に接し、西は折戸坂によって大間町に続き、南に山地を負い北は津軽海峡に面し、海岸線にそって東西に長くのびる漁村である。

本村は下風呂、易国間、蛇浦の三大字より成り、藩制時代この三大字はそれぞれ独立した三つの村であった。

本村東端にある下風呂は往古、湯元と称され古来温泉地として知られたところである。

ここには、大湯、新湯、二ヶ所の湧口があり、ともに硫黄泉であるが、大湯は金瘡及び打撲傷に、又新湯は婦人病や皮膚病にそれぞれ効能があるといわれ、藩制時代から多くの湯治客を集めてきたところである。

易国間は本村の中央部にあり、旧称湯澤野とよばれていた。かつて享徳・康正の頃(一四四五年前後)下北におこった蛸崎の乱のとき、蛸崎氏は軍馬兵糧を大陸より購入したが、それらを積載した船舶が当時湯澤野とよばれていたこの地に着船したと伝えられ、そのことにちなんでやがて異国の澗と呼びなされるようになり、乱終結後の地名更改により改めて湯澤野を異国澗に、湯元を下風呂に、蛇沼を蛇浦にかえたといわれている。

また、一説によると、往古この地に蝦夷の酋長アシタカが居住し、この地を蝦夷語でエコンクマと称したので易国間の地名になったともいう。

次に蛇浦は本村の西端に位置し、古くは蛇沼と称したのが後、蛇浦と改められた。この地にはむかし塩を焼く(製塩のための)釜場があったといわれ、漁師たちはむかしからこの蛇の呼称を忌み、蛇浦の地名をきらい釜谷の通称を用いて

いたという。一説には釜谷は蝦夷語のカマ・ヤに由来する呼称で、カマは平らな岩、ヤは岸又は陸の意であるという。(中略)

明治維新によって、下北半島は一時黒羽領となり、黒羽藩の支配を受けたが、明治三年旧会津藩の長男、主松平容大が斗南三万石に移封されるにおよび、その支配を受けるようになる。そして斗南藩がその領地である三戸郡の一部と上北下北を十区に分け、各区に戸長を置いたとき、下風呂は第八区に、易国間と蛇浦は第九区に属していた。

廃藩置県の後、明治四年田名部に青森県支庁が置かれたが、同六年に廃されそこに代わって第六大区役所が置かれることになる。この第六大区は5つの小区に分かれており、このとき下風呂は正津川・大畑と共に第三小区に属し、易国間・蛇浦は大間、佐井などと一緒に第四小区に編入されていた。

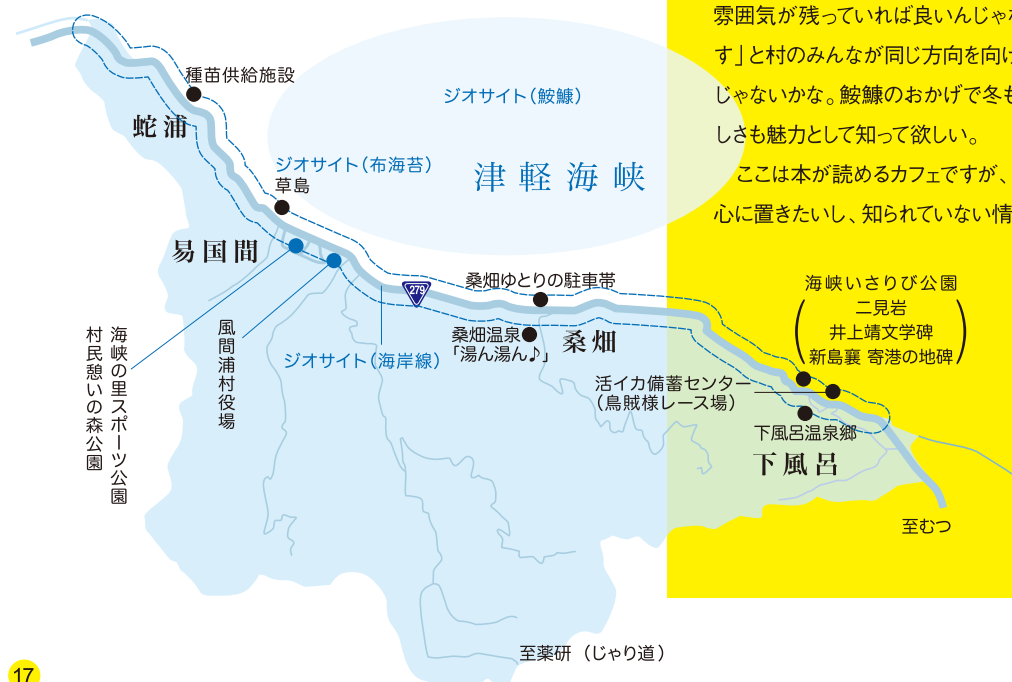
次いで明治十一年の郡制施行によって、田名部に下北郡役所が、又村々にはそれぞれ戸長役場が置かれたが、同十六年この各村々の戸長役場は廃され、旧小区毎に組合戸長役場が置かれることになり、明治二十二年の町村制施行まで続く。

明治維新より町村制施行までの地方行政の動きは誠に目まぐるしく変り、混乱を生みだしていたが、これも明治二十二年四月の町村制施行によってようやくおちつくことになる。制度的には、町村制の上に立った新しい近代のはじまりである。

こうして、本村も又明治二十二年四月をもって従来の下風呂村、易国間村、蛇浦村の三村を合し、その一字ずつをとって村名を風間浦村とし、今日にいたっているわけである。

気がつかない宝もの(風間浦ジオサイト)

この下北ジオパークには、大地の成り立ちや地域の歴史などが個性的な16のジオサイトが点在しています。中でも「風間浦ジオサイト」の魅力は、火山フロントの本州最北部・燧岳の麓にあって低地が少ないながら、海岸線のわずかな平地に住宅や温泉街があります。かつては海底だった段丘が12万年前の波浪によって平坦地となった土地に、学校や田んぼを作った知恵と工夫にあります。また、海岸部の急峻な斜面が海底深くまで続くことでキアンコウが生息しやすい環境となった漁場、江戸末期の交易用船着き場のために投入された多数の石にフナリが付着した磯場などがあげられます。海底から高台まで、海岸線に沿って営まれる人々の豊かな暮らしが感じられる、注目のジオサイトです。



プロフィール／風間浦村出身・在住のデザイナー。「マグロー筋Tシャツ」が有名。下北5市町村で運営されるクラウドファンディング「FAAVOしもきた」の最初の達成者「shimofuroカフェ」を下風呂の空店舗を利用してオープンさせた。

ここは本が読めるカフェですが、ジオパークなど下北を知るための本を中心に置きたいし、知られていない情報も発信していきたいと思っています。



草島と蛇浦海岸を望む



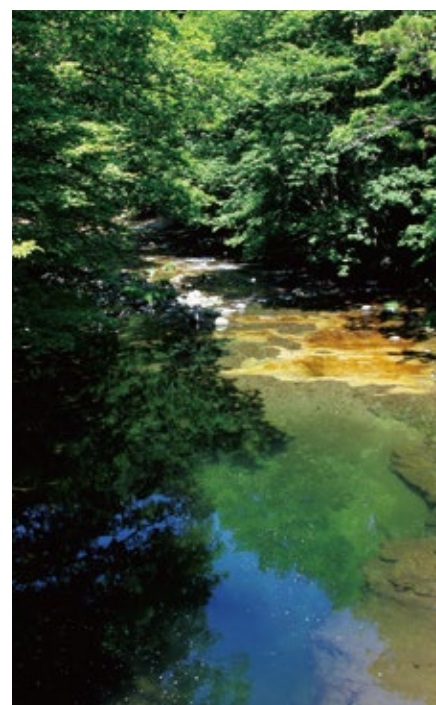
鮫鰈



布海苔採り体験ツアーのようす



二見岩(海峡いさりび公園)



易国間溪流



漁り火



蛇浦海岸の彫刻



村民憩いの森公園



夕日

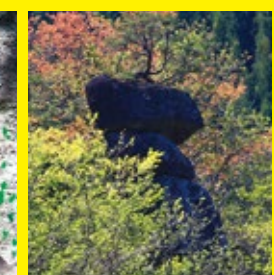


祭りは人々の絆を確認し
神々の存在を再認識する儀式である

龍神祭

1884年(明治17年)から下風呂地区で毎年8月26日と27日に行われてきた勇壮な神事です。風間浦村史には『この始まりは、明治10年頃鶴岡市の善宝寺の五重塔建立の時、原木を下風呂の佐賀家の持ち船の灘丸で海上運送をした縁で、明治17年に善宝寺から寄進された龍神像を奉納したことが始まりと伝えられる。当時は佐賀家と自由寺で行っていたが、昭和10年頃から地区の信者と船主が加わった。昭和57年から下風呂漁業協同組合が祭主となり、近隣の曹洞宗の僧侶によって、自由寺で海上安全と豊漁祈願の大祈祷会が行われるようになった。』と起源が記されています。

初日には曹洞宗僧侶と船主の全員が集まり、自由寺での大祈祷会が営まれます。この日は宵宮も開かれ賑わいます。2日目はいよいよ本祭り。漁船の海上安全と大漁を祈願して、船団が大漁旗を翻しながら焼山沖から甲沖まで海上運行をします。この祭典の面白いところは、船団の先頭となる「御座船」をくじ引きで決めるところ。ご祈祷の後くじ引きを行い、一番くじを引き当てた船は御座船となり、龍神像とそれを護る僧侶、組合長を乗せ船団の先頭を走ります。最後は下風呂漁港の沖合で自由寺の僧侶が祈願札を海底に沈める納札の儀式を行ないます。ちなみに御座船に選ばれるのは大変名誉なことであり、船頭らの憧れでもあります。御座船は一年間大漁に恵まれるという言い伝えがあり、くじ引きにのぞむ漁師たちはまさに真剣そのものです。



桑畑立石大明神

風間浦村の中央部に位置する桑畑地区で、地元の漁師たちにとって海の守護神“立石様”として古くから厚い信仰を集めているのが「立石大明神」。桑畑漁港沿いの国道から南に2km、険しい山道の先に垂直の偉容を現わす巨岩は、高さ25m・幅8m・奥行き10mほど。その昔、地元の漁師が時化と霧で視界を失った時に、この岩の上に灯明が輝き、それを頼りに岸まで辿りつくことができたと伝承されています。毎年5月8日には集団で山に入り、海での安全と大漁を祈願して参拝。岩の前でお弁当などを頂きながらお花見をするのが慣例となっています。

4つの地区、4つの祭り

風間浦村の祭り

若宮稲荷神社祭典

【10月 下風呂地区】

若宮稲荷神社祭典の歴史は古く、その起源は1657年(明暦3年)にまでさかのぼります。村内で唯一の秋祭りは2日間に渡って賑やかに行われ、夜ともなれば下風呂地区の家々に提灯が灯り、何ともいえない風情を醸し出します。

まず猿田彦が道を開き、神楽が道を清め、巫女、宮司、そして神輿と続き、最後に船山車が祭りを盛り上げます。圧巻なのが2日目の「くゐ獅子」。その激しい舞は迫力の一言です。最後は全員で車座になり、お囃子の演奏で幕を閉じます。



八幡宮祭典

【8月 桑畑地区】

八幡宮は易国間字湯ノ上に鎮座し、1716年～1736年(享保年間)の勧請。運行される船山車は、「子どもに郷土愛と希望を持たせたい」と桑畑小学校の父兄会で1957年(昭和32年)に新造船(明神丸)を作ったのが始まりと云われています。一緒に行われる神楽は、1891年頃(明治24年頃)にむつ市の栗山の大工が桑畑へ来ていた際に伝授されたもので、その後神楽会が組織され獅子頭が作られました。8月14日に宵宮があり、15日には例祭が行われます。家々の前で行われる舞は圧巻です。



大石神社祭典

【9月 易国間地区】

大石神社のお祭りは迫力があります。「ヤレヤレヤレー」の威勢の良いかけ声とともに、襦袢姿の若者たちが船山車を引いて町内を練り歩きます。鎮座地は易国間字家ノ上で、勧請は1678年(延宝6年)。易国間の船山車は「おこし舟」(漁師型とも云う)という舟の型を真似て作ったもので、他の地区のものとは少し違っています。最後に神社鳥居前で行われる神楽演舞は見応えがあります。易国間漁港で行われる神事で大漁と安全が祈願され、江戸時代から続く神楽とともに賑やかに祭りが続きます。



折戸神社祭典

【8月 蛇浦地区】

蛇浦地区には折戸神社奥の院が稲荷神社よりも古く、産土神だという言い伝えがあります。勧請は1617年(元和3年)。奥の院の神様は女神様で、昔火事があったとき、空から火を消したと云われています。例祭時に奥の院に鎮座する御神体の遷座式を行っているのは下北地域でも珍しく、厳粛に古式の作法で今日まで受け継がれてきました。祭りは船山車や子ども神輿、子どもねぶたが引かれ、暗くなるまで町内を練り歩きます。また、昔ながらの灯笼流しや盆踊りなどが賑やかに行われます。



本州最北の温泉郷

風間浦村の温泉



大湯



桑畑温泉湯ん湯ん♪



足湯



旅館浴槽

湯に浸かると誰でも旅人になる
風間浦は不思議な場所だ

下風呂温泉郷

遠く漁り火を眺めながらの温泉は、幻想的で旅情をかき立てられます。本州最北端の温泉郷として知られる「下風呂温泉」。お湯の歴史は古く、室町時代から刀傷に効く温泉として湯治客で賑わっていたといえます。海の近くの硫黄泉はとても珍しく、昭和の温泉街らしい鄙びた風情とともに作家の井上 靖や、同志社大学創立者である新島 襄などにも愛されました。

小さな温泉郷の中に源泉が3つあるのも下風呂の特徴。海岸から山手に進んだ高台に100mほど離れて「大湯」と「新湯」の湧き口、海辺から湧いている「浜湯」があり、それぞれ泉質が異なります。現在9軒の旅館やホテルが営業していますが、それぞれに引いている源泉が違うので、一つの温泉郷でも泊まり歩く楽しみがあります。また、源泉が湧く「大湯」と「新湯」には地元の人たちが通う公衆浴場があり、誰でも入ることができます。

宿泊した人のみの限定販売ですが、青森ヒバの手形を持って3軒の温泉をハンゴできる「遊めぐり(湯めぐり)」も好評です。



下風呂温泉郷



下風呂温泉郷

【大湯】

- 含硫黄・ナトリウム・塩化物泉・硫酸塩泉
- 筋肉痛・関節痛・消化器疾患・皮膚病・婦人病・糖尿病・動脈硬化症

【新湯】

- 含硫黄・ナトリウム・塩化物泉
- 筋肉痛・関節痛・消化器疾患・皮膚病・婦人病・糖尿病・動脈硬化症

【桑畑温泉湯ん湯ん♪】

- ナトリウム・カルシウム・塩化物泉
- 神経痛・筋肉痛・関節痛・五十肩

【足湯】

- 含硫黄・ナトリウム・カルシウム・塩化物泉
- 切り傷・打ち身・慢性皮膚病・慢性婦人病・リウマチ・神経痛・疲労回復



大湯



大湯浴槽



新湯



新湯浴槽



下風呂温泉
遊(湯)めぐり手形

手形を800円で購入すれば、共同浴場「大湯」「新湯」・ホテル・旅館のお風呂のうち3箇所に入浴することができます。



桑畑温泉湯ん湯ん♪



桑畑温泉湯ん湯ん♪ 露天風呂

ここには人を楽しくさせるなにかがあるようだ

風間浦鮫鯨感謝祭

毎年2月の第1日曜日

地域団体商標へ登録される地域ブランド「風間浦鮫鯨」。風間浦村は漁場が近いことから、生きたままの鮫鯨が水揚げされることでも知られています。鮫鯨が旬を迎える12月から3月は、下風呂温泉の旅館やホテルで風間浦鮫鯨のフルコースが味わえるほか、毎年2月の第1日曜日には下風呂漁港を会場に風間浦鮫鯨感謝祭が開催されます。雪国ならではの「鮫鯨の雪中切り実演」をはじめ、熱々の「鮫鯨汁」やここでしか食べられない数量限定の「鮫鯨鰓」の販売などのほか、運が良ければ鮫鯨が水槽を泳ぐ姿を見ることができるかもしれません。



風間浦村だから見られる
「鮫鯨の雪中切り」
右は大人気の鮫鯨の握り寿司



ゆかい村 海鮮どんぶりまつり

毎年7月の最終土曜日

スルメをぶら下げたユニークな“スルメカット”(テープカット)で幕を開ける「海鮮どんぶりまつり」では、風間浦産の活イカはもちろん、ウニやアワビをのせた贅沢なミニ井が限定数で販売されます。下北近隣からの名産品の出店も会場を賑わし、下風呂漁協女性部の「布海苔そば」や「布海苔ラーメン」は、毎年長蛇の列ができるほどの人気ぶり。名物イベント「元祖 烏賊様レース」や、特産品が当たる抽選会・活イカ活ウニすくい大会・コンサート・地元の子どもたちによる神楽などが終日行われ、目の前で上がる迫力の花火でフィナーレを迎えます。



布海苔採り 体験ツアー

毎年2月・3月

風間浦村の冬の風物詩「布海苔採り」。厳寒の風間浦を楽しんでもらう1泊2日のツアーでは、今や風物詩となっている「布海苔採り」を実際に厳寒の磯場で体験でき、採った布海苔はお土産に持ち帰ることができます。また、下北の人気おやつ、金太郎飴のような「べこ餅作り」にも挑戦します。宿泊は本州最北の旅情あふれる下風呂温泉郷。熱めの硫黄泉で温まったあとは下北づくしのお料理を堪能、お腹も心もほっこります。



観光と結びつけた漁業振興を視野に

風間浦鮫鯨のブランド化



臨海地域である風間浦村は、津軽海峡に面した海岸線の延長約20kmに、下風呂・桑畑・易国間・蛇浦の集落が点在しており、4つの漁港と昭和24年に設立された下風呂・易国間・蛇浦の3つの漁業協同組合が、村の基幹産業である漁業を支えています。

漁としては刺網・一本釣り・いか釣り・小型定置網・採貝・採藻など近海漁業が中心で、漁獲量からするとするめいか・たこ・こんぶ漁が主軸ですが、こうした村の主要漁獲物は年ごとの変動が大きいので、漁獲量・漁獲高ともに安定した漁業を求めて模索してきました。また、従来の漁業にとどまらず、風間浦産ならではの付加価値を高めようと、平成5年度に営業を開始した「活イカ備蓄センター」、平成6年度に組織された「水産物開発販売振興協議会」などと連携をはかり、地域活性化を意識した取り組みに力を入れています。

さらに近年では、鮫鯨の水揚げが上位を占め注目されているところです。鮫鯨の水揚げでは全国トップクラスの青森県でも、八戸市に次ぐ毎年60tほどの水揚げですが、品質も良く漁場が近いことから生きたまま水揚げされることで注目されています。漁期である冬の観光と結びつけたイベント開催など、「風間浦鮫鯨のブランド化」と「冬季間の観光振興」を目指した事業も進んでいます。

「風間浦鮫鯨」には明確なブランド基準が設けられ、平成26年9月には鮫鯨として初めて「地域団体商標」に登録されたことで、さらに期待が高まっています。また、「元祖 烏賊様レース」で知られる「活イカ備蓄センター」も温泉地として知られる下風呂にあり、常時300匹ものイカを生きたまま備蓄できる水槽を持つ観光施設としても人気があることから漁業振興に一役買っています。

今後の課題としては、3漁協の合併や事業の提携による合理化が指摘されており、流通の改善や漁協の財政基盤強化が急がれているところです。



漁業資源を守ること、これからの漁業に繋げたい

下風呂漁業協同組合代表理事組合長 橘 和幸



橘和幸さん(中央)と齊藤義則さんと真さん親子

ここは昔からイカ漁が盛んな村です。近年は温暖化による海水温上昇と乱獲からか、ヤリイカの獲れる時期が11月と12月に集中します。漁期が短いと漁師も無理をしてしまうため、冬場は特に事故が心配です。以前は6月の後半から7月、8月には夏イカが獲れたものですが、今は6月に少し獲れたら漁のない月が続くような状況です。全国的には年中イカの回遊を追って、大きくなっていないうちに獲ってしまうところが多いようです。ここではイカが来るのを待ちますが、どこかで大型船が根こそぎ獲ってしまうとお手上げです。漁は自然が相手、今ある資源を守りながら続けていかなければなりません。

鮫鯨の漁期は12月から3月までですが、昨年は水揚げが少し減りました。「風間浦鮫鯨」としてブランド化されたのは昨年、評判は良いですね。鮫鯨はほかでも獲れますが、生きたままの水揚げは珍しく、寒いところで獲れる鮫鯨は旨味が違います。風間浦沖は2マイル、3マイルと早い海流が流れているので、良く泳いで身が締まり、築地でも高値で取り引きされています。この鮫鯨を長く獲り続けるためには、やはり期間を守って乱獲をしないこと。鮫鯨の漁は大型船が刺し網、小型船が延縄で操業しています。網を使わない延縄はおそらくここだけでしょう。これなら小さい鮫鯨を海に戻すことも可能です。刺し網の場合も、産卵に影響がないように漁期を短くするなど努力をしています。

下北縦貫道路が開通すれば、流通がもっと良くなるわけですから、将来的には下北が一つになって、漁業を守り立てていければと思っています。



漁業組合の皆さん。(龍神祭)



イベントと温泉と食で村おこしを

下北ゆかい村としてアイデアをしぼってイベントを企画



「ゆかい村海鮮どんぶりまつり」と
「風間浦鮫鯨感謝祭」のようす

風間浦村の観光資源には、古くからの湯治場として知られる下風呂温泉郷があります。しかしながら温泉以外の魅力づくりが十分ではなく、下北周遊観光の中で、宿泊だけの立ち寄り所という位置づけを否めない現状が長く続いていました。これに対して村では、温泉郷を核とした散策ルートづくりや水産資源を活用したイベントを展開するなど、観光資源の整備や発掘、新しい名産品の開発など、滞在型観光とそれに伴う地域活性を目指してきました。

水産資源を活用した誘客イベントとしては、すでに定着した感のある「布海苔採り体験ツアー」や「元祖 鳥賊様レース」はもちろん、「ゆ(湯)」「かい(海)」を意味する「下北ゆかい村」をキャッチフレーズに掲げた「下北ゆかい村 海鮮どんぶりまつり」や「風間浦鮫鯨感謝祭」など、活イカや布海苔、新たに地域ブランド化を進めている「風間浦鮫鯨」を活用した食のイベントがあります。いずれも下風呂温泉の宿泊を絡めるなど、アイデアをしぼりながら相互に関連付けることで、相乗効果を得られる観光振興を進めています。

もう一つの特産であり長く風間浦村を支えて来た「青森ヒバ」は、日本三大美林に数えられる堅牢で腐りにくい特性を持っていますが、成木までには約150年かかることから、今は資源の確保が難しい状況にあります。そのため間伐材などを利用した工芸品がつくれ、観光土産として人気があります。青森ヒバの耐湿性・耐久性・抗菌作用・ヒノキチオール含有の爽やかな芳香を生かした製品には、まな板・箸・コースターなど身近なものから、二つとない形を生かした椅子や照明器具・パズル、ハガキとして使えるイカ型やペン立て、握ることでマッサージできる湯玉など、いずれも持ち帰って使える旅のお土産としても好評です。このように温泉と食をイベントで繋げた企画で、観光の村としての賑わいを取り戻しています。



かざまうら産直友の会「産地直売所」の皆さん。

産直施設の活用



産地直売所

平成25年5月にオープンした海の産直施設「ふのりちゃん」。国道279号沿いの蛇浦地区「布海苔記念公園」内に、「地産地消の推進」と「販売農漁家の育成確保」を図ることを目的につくられました。道の駅がない風間浦村ではそれまで、専門に村の特産品を販売する場所がありませんでした。この直売所は、風間浦村の農家や漁家など11人ほどで構成する

「かざまうら産直友の会」が運営しています。

友の会は地産地消を進めようと有志が集まり平成20年に発足されましたが、この産直施設ができるまでは活イカ備蓄センターの日曜朝市で販売していたものです。

ここで販売されているのは、風間浦産の布海苔や昆布などの海産物が中心ですが、会員の皆さんが育てた野菜や、時期になれば山菜、乾燥布海苔や昆布・わかめの加工品、青森ヒバの木工品などが並びます。地元の人だけが食べている珍しい海藻もあり、おいしい食べ方を丁寧に教えてくれます。また、愛称の「ふのりちゃん」は、風間浦中学校から寄せられた51案の中から選ばれました。



営業は冬季を除いた4月中旬～11月初旬。
時間は9時30分～15時30分。毎週水曜日が定休日。

風間浦村の名産品



風間浦村の名産品と云えば、津軽海峡の海の幸を使った水産加工品と、青森県を代表する木材「青森ヒバ」を使った木工品です。

なかでも人気が高いのは、冬の味覚である鮫鯨です。村では「風間浦鮫鯨」として売り出しブランド化を進めてきた効果もあって、今では高値で取引されるまでになりました。東京の鮫鯨料理専門店でも取り扱われるようになり知名度も上がっています。

津軽海峡産のイカは根強い人気があり、夏の味覚として「イカの刺身」は勿論、「イカの塩辛」や「イカの一夜干し」等にも加工され、お土産品としても販売されています。

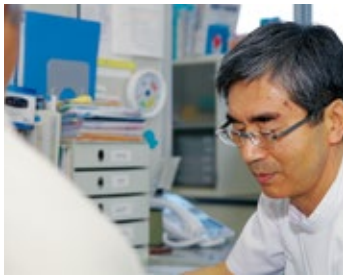
「青森ヒバ」の木工品は、ヒバの抗菌力とリラックス効果のある香りが話題となり、JAL国際線のファーストクラス専用の箸にも使用されているところ。

これらの名産品はふるさと納税の返礼品にも活用されています。



村民が安心して暮らせる村へ

子どもからお年寄りまで、健康な毎日が送れるように



【医療】少子化対策と高齢化対策は大きな課題です。風間浦村ではむしろ、小さな村であることを利点として「健康に寄り添うやさしいむらづくり」を目指して、村民の暮らしに安心と活力を与える政策を進めています。

下北地域では各市町村で構成する「一部事務組合 下北医療センター」を形成しています。近代的な施設で高水準な医療を提供する基幹病院としての「むつ総合病院」を中心に、隣接する大間町の「国民健康保険 大間病院」、風間浦村では「国民健康保険 風間浦診療所」において内科・外科・小児科の診療を行っています。交通アクセスが良いことから、函館市の医療機関への利用も多い状況です。下北地域は心疾患や癌の死亡率が高い土地柄であるため、こうした医療機関が各種検診の受診率向上に力を入れ、村民の健康を守っています。

また急激な高齢化が進むなか、特に高齢者に対しては介護予防教室「いきいき会」の開催や、生活習慣病を予防する料理指導、身体機能低下予防のための運動指導など、お年寄りが元気に暮らせるようアドバイスに努めています。

こうした村の保健体制は保健師や保健協力員とともに、むつ保健所および診療所、広域的ネットワークによる関係機関との連携のもと保健計画が樹立され、訪問指導・健康教室・健康相談などが計画的に実施されています。



風間浦診療所



風間浦村総合福祉センター「げんきかん」

【福祉】村では高齢人口の割合が年々増加しており、急速な高齢化と高齢者のみの世帯増加が問題となっています。したがって今後はさらに、高齢者福祉サービスへの需要が高まると予想されます。

村内に高齢者施設はありませんが、平成10年度から福祉施策の核として「総合福祉センター げんきかん」がサービスの提供を始めています。加えて「高齢者介護センター」、村民の疾病予防や健康維持などのサービスを行う「保健センター」「社会福祉協議会」が、それぞれの立場で福祉に取り組んでいます。

平成17年には民間のグループホームも開設されました。また、高齢者の生きがい対策として「老人クラブ活動」の促進、「敬老会」の開催などを実施しています。平成26年度には、高齢者の持つ優れた技術を活かそうと「シルバー人材センター」が設置され、生きがいづくりに貢献しています。

また高齢者世帯を対象に、ICT(情報通信技術)を活用した見守りシステムを導入することで緊急事態に備える、健康寿命を伸ばすために村民参加型の運動事業を実施するなど、新たな計画も進められているところです。

ほかにも高齢者が元気に活動できるよう、憩いの場の設置を含め介護予防事業の強化や生涯学習・ボランティア活動などで地域内の連携を図り、お年寄りに優しい村づくりに取り組んでいます。

一方、「児童福祉」としては保育所を整備したうえで、送迎バスサービスを実施しています。「母子福祉」では生活の安定と自立のための対策や相談機能を充実させ、積極的に社会参加の場を提供しています。「障害者福祉」は、社会復帰体制の確立と就労機会の提供など、地域の実情に応じたきめ細やかな対応に努めています。

いずれも「医療」と「福祉」が連携して情報を共有することにより、効果的な保健・福祉・医療の実現を目指しています。



「げんきかん」デイサービスの利用者とスタッフの皆さん。



人づくりとネットワーク

3地区の小学校が統合、風間浦小学校が誕生



【教育】風間浦村では少子化の影響で児童数が減少しているため、教育施設の統合整備が課題となっていました。平成18年度に3地区の統合整備が完了した「風間浦保育所」は、「地域子育て支援センター」を併設し、多様化するニーズに対応した保育サービスを行っています。小学校に関しても下風呂・易国間・蛇浦の3校とともに児童数の減少が進み複式学級が生じていたことから、その解消が重要課題となっていました。平成28年4月にこれら3校を統合した「風間浦小学校」が易国間に開校したことで単式学級が実現、初年度には新1年生11人を迎えた全校生徒70人余りが新しい校舎で学んでいます。

中学校に関しては平成元年に3地区の中学校が統合されています。今回の小学校統合により小・中ともに1村1校となるため、連携教育の強化が期待できるとともに、校舎に関しても同じ敷地内での一体型を進めることで、義務教育9年間の連続性を強化する一貫教育の実現も視野に入ってきました。



新設した風間浦小学校



風間浦小学校の生徒の皆さん。

新設の風間浦小学校においては太陽光発電施設を設置、環境・エネルギー教育への活用も図っています。さらに、災害時には児童や地域住民の緊急避難所となることから、防災備品庫・自家発電設備・専用井戸も備えています。

これに加えて風間浦中学校のグラウンドを、風間浦小学校及び村民が広く活用できる多目的グラウンドとして整備しています。

風間浦村では村の宝である子どもの成長を応援し、充実した教育環境を提供しようとプロジェクトを立ち上げています。一つは歴史的に縁のある「同志社大学」、それに連携協定を結ぶ「青森公立大学」の学生たちとの交流イベントで、村の子どもたちの視野を広げ、社会性を育むことを目的としています。また、従来の教科のほかにICT（情報通信技術）を活用した多様な学習を行うことで、学力の向上を図る「子ども学習塾」、同志社大学と小学校をICTで結び、村内児童向けに英語の遠隔授業を行うなど、ネットワークを活かした事業が進められています。

【文化】風間浦村では貴重な文化遺産を後世に伝えようと、広範囲にわたり調査や伝承活動を進めています。平成12年度には山車行事が県無形民俗文化財に指定されたことで、祖先から受け継がれてきた文化財を後世に伝える保護・保存活動を推進、郷土芸能や文化団体活動を奨励しています。やはり高齢化が進むなか、後継者の育成を目指すとともに記録映像による保存にも力をいれています。





■風間浦保育所

平成18年に統合整備。平成24年に今後の保育や幼児教育のニーズに合わせて、保育事業の民営化を進めることを提案。翌25年には議会の承認を経て「社会福祉法人 みちのく福祉会」を管理者に指定しました。定員70名(平成29年4月1日現在で、在籍児童数38名)。職員16名。木のぬくもりが感じられる施設ではいつも元気な声が響いています。



■風間浦中学校

平成元年に統合整備。コンピュータ教育などの充実をはかるとともに、通学の不便を解消するためにスクールバスを導入しています。村内に高等学校はありませんが、近隣への進学率はほぼ100%で、有能な人材育成のために村では奨学金貸与制度の充実に努めているところです。生徒数は男子18名・女子18名の計36名(平成29年4月1日現在)。



学校法人同志社(本部・京都市)との交流

【新島襄と同志社大学】

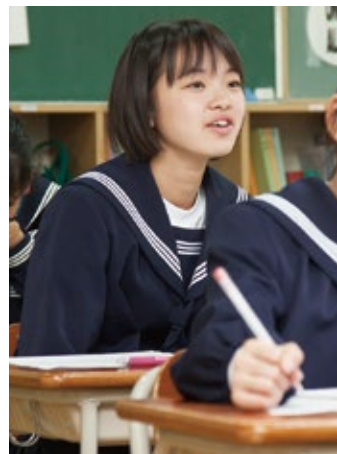
京都に同志社大学の前身である同志社英学校を創立した新島 襄は、安中藩士の子として生まれましたが、アメリカに憧れを抱き渡航を決意、鎖国中の日本から船で開港地の函館へと向かう途中、荒天を避けて下風呂港に寄港し3日間滞在しています。後に当時の下風呂温泉の記述を「函館紀行」に残し、その史実を同志社交友会青森県支部が取り上げたことから、平成4年に下風呂の海峡いさりび公園に寄港記念碑が建立されました。これをきっかけに同志社との温かな交流が現在まで続いています。



【同志社との交流】

同志社大学の学生や留学生を風間浦村に招いて行われる小・中学生との交流や、風間浦中学校の二年生全員が同志社中学校を訪ねたり、また、同志社中学校の生徒会が風間浦中学校を訪れたりとの交流は年々深まっています。

毎年、同志社大学の学生や留学生が村を訪れ、小・中学校を訪問。各学校の児童生徒たちは、それぞれ「国際理解を深める」などテーマを決め、郷土菓子の「べこもち作り」や「合唱披露」などで交流を深めています。



いつまでも美しい村に

恵まれた自然を大切にしたい環境整備を目指して



【環境美化】美しい自然に恵まれた風間浦村では、自然環境や農漁村景観を活かし、村民が誇りと自信を持ちながら快適に暮らせる村づくりへの取り組みを進めてきました。村の中央部、易国間の高台には「海峡の里スポーツ公園」が整備され、広く村民に親しまれています。

村ではこの素晴らしい環境を維持していくために、学校や公共施設周辺の緑化を進めるなど、個性的で豊かな地域景観づくりに努めています。また、村の花が「はまなす」であることから、街路などに苗木を植樹することで魅力ある街づくりを推進しています。

【簡易水道】村の簡易水道は「簡易水道施設整備計画」のもと、村内全域の整備が終わっています。その後は老朽化が著しい水道施設を平成2年度から計画的に改修し、平成16年度までに蛇浦と易国間・下風呂と甲・桑畑の3施設への統合整備が完了し、現在は安定的な供給を行っています。【ごみ処理】ごみ処理に関しては、むつ市の下北地域一般廃棄物処理施設「アックスグリーン」で、下北地域における市町村の共同処理が行われています。また、「アックスグリーン」のリサイクルプラザでは、分別収集されたごみを資源として再生させるリサイクル処理を行っています。

【防災】防災における設備は、国の基準のもと村の実情に即した整備を進めています。昭和47年には広域常備消防による「風間浦消防分署」を設置し、本団と4分団の消防団員127名で村の安全を守っています。

また、風間浦村は太平洋岸に面しており、日頃から津波や災害などに備える防災意識を強くしていますが、平成23年の東日本大震災以降は大津波警報を想定した大掛かりな避難訓練をはじめ、情報伝達・消火訓練・炊き出し訓練などで非常時に備えています。また防災計画に関しては、近隣の大間原子力発電所の進捗状況を踏まえながら修正することとしています。



蛇浦ゆとりの駐車帯



風間浦警察官駐在所



風間浦消防分署

【交通】風間浦村へのアクセスは、みちのく有料道路と下北半島を結ぶ「下北半島縦貫自動車道」をはじめ、国道や村道など交通網の整備が進められているところです。特に国道279号は村と村外を結ぶ連絡道路であり、経済・文化・観光において重要な路線でもあります。下北広域圏の中心・むつ市までの約40kmは、下北交通のバス路線が結んでいます。また、東日本大震災の教訓を活かし、国道279号の代替道路として広域避難道の整備を進めていくことにしています。

また、交通エリアの拡大に伴い交通安全対策に力を入れ、村民一体の交通安全運動を推進、道路診断の実施や交通安全施設の整備を進めるとともに、交通安全意識の向上にも努めています。



野球場（海峡の里スポーツ公園）



村民憩いの森公園

【情報通信環境】近年、国勢調査や確定申告などインターネット申告が可能となってきたことで、今後ますますICT（情報通信技術）の活用が増えていくことが想定されます。そこで情報通信手段として主流となる、携帯端末通信の無線通信インフラ「Wi-Fiステーション」の整備と、それに伴う村民のICTスキル向上のため講習会などの開催を順次進めていくことにしています。

【移住環境】減少の一途をたどる人口問題を解決するべく、風間浦村では単身世帯住居を整備することで、近隣地域に通勤する若者の定住を図ろうと「若者向け単身世帯住居整備事業」を、移住促進のためにPR活動を強化する「移住推進PR事業」の推進計画を進めているところです。



桑畑公民館



甲集会所



中央公民館



下風呂公民館



蛇浦公民館



簡易水道施設



議会組織図

議会 — 事務局



議会の様子

◆議会

村議会には、村民から選ばれた8人の議員で構成され、議会事務局が設置されています。

村議会には、「議会運営委員会」「常任委員会」「特別委員会」が置かれ、「常任委員会」には「総務常任委員会」「議会広報編集委員会」が、「特別委員会」には「大間原子力発電所対策特別委員会」が平成27年5月に設置されました。

議会では、条例制定・改廃、予算及び決算認定などの議決のほか、請願・陳情の審査などについて、議員が村民にかわり村長から提案された議案などの審査を通じて、村民の生活がよりよいものとなるよう議論し決定しています。

本会議は3月・6月・9月・12月の年4回にわたって定期的に行われる定例会と、必要に応じて開かれる臨時会が行われています。議会で話し合われた内容は「かざまうら議会だより」として発行され、議案などの審議内容について知っていたくなど、明るく住みよい村づくりに向けて取り組んでいます。

村議会議員



金森一規 議長



杉山 太 副議長



平井賢一 議員



中嶋 茂 議員



菊池隆年 議員

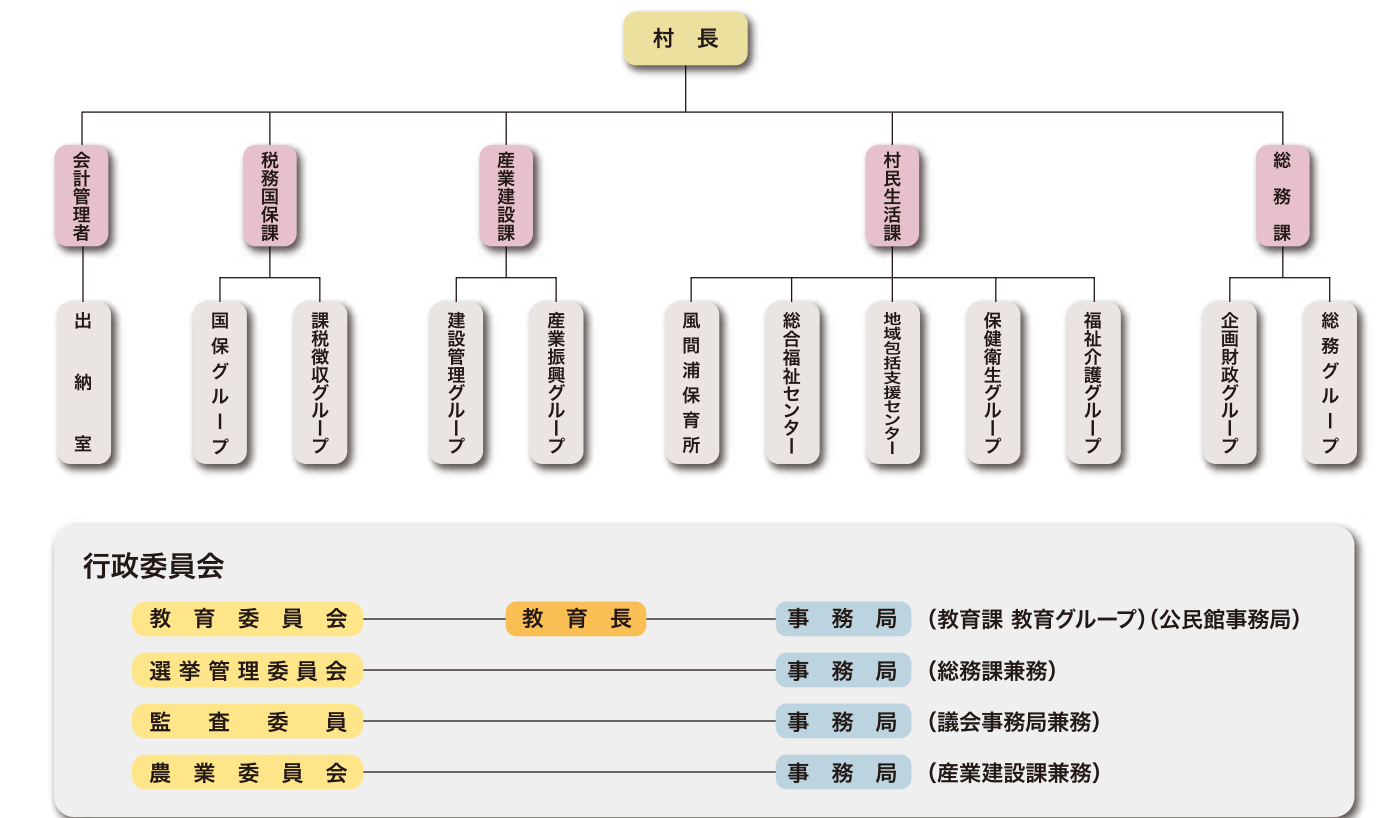


蛸島 巨 議員



能登勝彦 議員

行政組織図



◆行政

風間浦村では行政需要と住民サービスに迅速に対応するため、これまでも機構改革が度々行われてきました。現在は総務課・村民生活課・産業建設課・税務国保課の4課と出納室によって構成され、行政委員会としては、教育委員会・選挙管理委員会・監査委員・農業委員会が設置されています。

また、下北地域広域市町村圏の振興整備に関する計画などの連絡調整・複合文化施設に関する事務、消防に関する事務・知的障害児施設に関する事務、し尿処理及びごみ処理に関する事務については、下北地域広域行政事務組合において、下北医療センターの管理運営などについては、下北近隣の市町村で構成する一部事務組合下北医療センターにおいて運営しています。

こうした行政と村民をつないでいるのが「広報かざまうら」です。行政の内容や重要なお知らせ、また旬の話題などをわかりやすく掲載し、毎月すべての住民世帯に配布しています。



富岡 宏 村長



越膳泰彦 教育長

村民憲章・村のシンボル・村民歌

村民憲章（平成元年三月二十五日制定）

わたくしたちは、緑の山、豊かな海、きれいな川に恵まれ、歴史と文化を大切にする風間浦村の村民です。

わたくしたちは、いつまでも郷土風間浦村を愛し、幸せを願い、健康で明るく住みよい村をつくるために、この憲章を定めます。

一、わたくしたちは、きまりを守り、親切で明るい村をつくります。

一、わたくしたちは、仕事に喜びをもち、豊かな村をつくります。

一、わたくしたちは、青少年に希望を、老人に生きがいを、そして心のあたたかい村をつくります。

一、わたくしたちは、自然を愛し、花と緑の美しい村をつくります。

一、わたくしたちは、常に知識を求め、スポーツに親しみ、楽しい村をつくります。

村のシンボル（平成元年3月25日制定）



花【はまなす】

- 潮風に強く、風間浦村の風土にあっている。
- 昔は、風間浦村の海岸沿いに、多く群生していた。



鳥【かもめ】

- 村内どこにでも見られ通称「ごんべ」としてよく知られている。
- 漁業を象徴する鳥である。



木【ひば】

- 古くから風間浦の産業基盤として村民の多くがその恩恵を受けた。
- 風間浦の山々に多く植生し、村民のだれにでも親しまれている。

風間浦村村民歌

おゝ我らが郷よ

作詞／横山あきら
作曲／板谷 隆
編曲／清水美知男

津軽海峡 あけぼのに
はばたく白き うみどりよ
祖父の拓けし この大地
天与のめぐみ ゆたかなる
おゝ我らが郷よ 風間浦

熱き情は 燃えたぎる
いで湯となりて 地に湧かん
理想を高く かかげつつ
共にはげみて 築きゆく
おゝ我らが郷よ 風間浦

千古の樹林 枝ゆらす
波のうねりの たゆまざる
風の息吹の たのもしく
集いてなごむ もろびとに
おゝ永久に幸あれ風間浦

風間浦音頭

作詞／横山あきら
作曲／板谷 隆
編曲／清水美知男

サアー南部下北 風間浦
人のこころの ぬくもりが
とけて流れる 湯けむりに
心安まる 花が咲く
いでゆ下風呂 情の湯
ソーレソレソレ 情の湯

サアー南部下北 風間浦
高松山の いただきに
流れる雲の 影うつし
緑したたる 溪流の
易国間川の 水清か
ソーレソレソレ 水清か

サアー南部下北 風間浦
蛇浦海岸草島や
一本松よ さびしから
誰か植えてよう一本
添えりゃ似合いの夫婦松
ソーレソレソレ 夫婦松

サアー南部下北 風間浦
つかずはなれず 二見岩
愛のさざ波 すそ濡らす
汐騒やさし さゝやけば
沖の漁火 恋あがり
ソーレソレソレ 恋あがり

サアー南部下北 風間浦
鎮座まします 立石の
衣見事に あやにしき
りんご茸に ひば林
山は桑畑 唄が出る
ソーレソレソレ 唄が出る

サアー南部下北 風間浦
津軽海峡 岸洗う
波のしぶきの 折戸浜
かもめ群れとぶ いさり舟
ゆれるハマナス 夢さそう
ソーレソレソレ 夢さそう

2017年
風間浦村資料編

